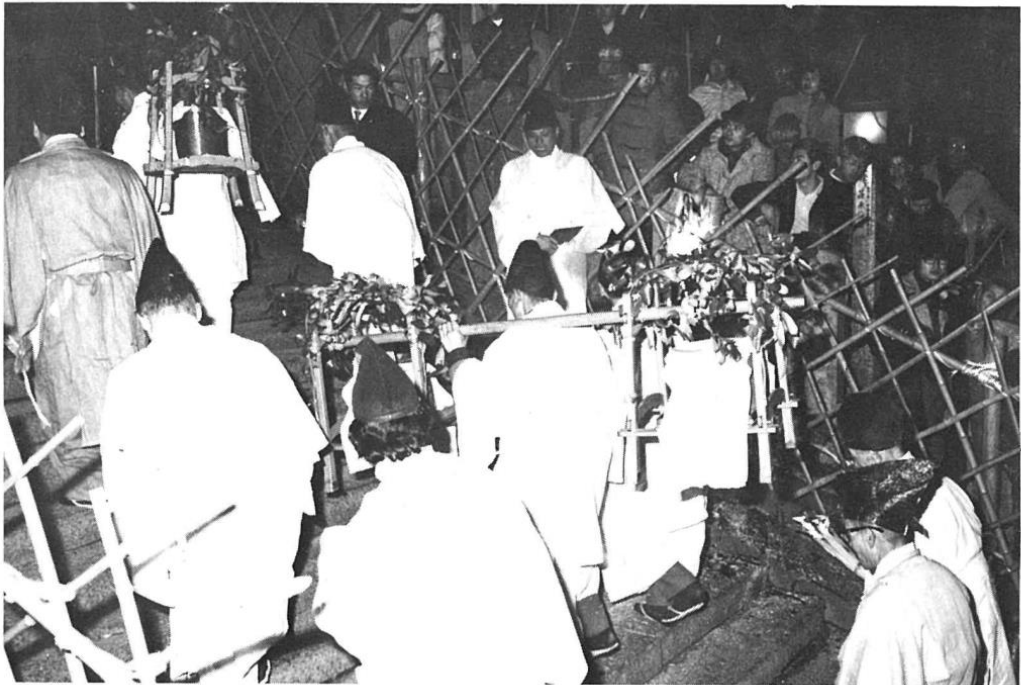


民俗博物館だより

Vol. VI No. 4

1980. 3. 20



(東大寺修二会・お水取)

目 次

民俗博物館開館5周年を迎えて……………	1
常設展新企画コーナー「生業を支えた職人」展の開設に伴って……………	2
春季テーマ展「諸職一町の職人・村の職人」……………	4
節分会(大和の民俗行事)……………	6
昭和54年度事業報告……………	8
寄贈民俗資料目録……………	11
寄贈図書目録……………	13
大和のオコナイ(民俗資料調査抄報)……………	15
おしらせ・他……………	15

民俗博物館開館5周年を迎えて

川内 一郎

当民俗博物館は、昭和49年11月に開館してよりはや5周年を迎えたが、その間、民俗文化を専門に扱うユニークな博物館として県民はじめ多方面の期待と支援に支えられて着実なあゆみを遂げてきた。

ここに、この5年間の当館事業活動のいくつかをふりかえってみて次のステップにつらなる展望を考えてみたい。

民俗資料の収集

当館の資料収集は、当館の設立が奥田知事の民俗資料保存の提唱に発したことから重点事業として開館後も継続して推進してきた。現在収集保存資料は、約9,000点であるが開館までの資料収集は民俗資料全般に亘る総合的な収集方式をとったのに対し、開館後は主として年に数回開催するテーマ展示に対応した収集方式をとってきた。これは、資料収集を他の事業活動に結び付けることによって資料収集の効率化と系統化を図ることを意図したものである。この方式は、これまでの実績からみて展示事業や調査研究事業との関連において利点が多く所期の成果があったと思われるが反面テーマに拘束されて収集が恣意的にかたよることは否めない。したがって、これを補完するため今年から一応2ヶ年計画で総合的見地より重点収集資料品目を選定して（今回の総合収集計画では生業のうち諸職関係資料に重点をおいている）県下各市町村に協力を願って資料収集を実施することにした。民俗資料の収集については、当館の開館趣意をふまえて今後とも継続して計画的に推進していきたいと思っている。

展示と教育普及事業

当館での展示は、常設展示とテーマ展示を有機的に組合せ、常設展示では本県の民俗文化の総論という形でくらしの中での生業をとり扱い、テーマ展では常設展と連動させて個々の民俗事象を各論的にとらえて年に3～4回の周期で企画展示を行っている。民俗資料の展示には、展示資料をとおしてその背景にある人のくらしを表現するために、くらしの

中で本来あるべき民俗資料相互の関連にもとづいてその構造的理解を促す配慮が必要である。今回常設展の中に従来の生業を主体とした展示構成に加えて「生業を支えた職人コーナー」を増設したのもこのためである。

展示と併せて教育普及事業の一環として開館当初から継続して実施してきたものに体験学習講座と民俗講座がある。体験学習講座は、展示コーナーでのただ観るだけという欠点を補い、資料を実際に使ってみるとか、あるいは作ってみるとか、いわば、民俗文化の追体験を通じて理解を深めようとの意図である。この意味では最近の手づくりブームに乗った感はあるが大そう好評をえている。民俗講座もより深い民俗文化の理解と関心を誘い、調査研究の発表の場として啓蒙普及に大いに役立っている。

博物館の顔ともいうべき展示と教育普及事業をこれからも調査研究の成果をふまえ収集資料の蓄積と相まってさらに刷新と充実に努めていきたい。

博物館と大和民俗公園

博物館の敷地として20haもの広域の大和民俗公園が併設されていることは当館の特徴の一つであるが園内には自然緑地や田園景観とともに本県の代表的な古民家が移築復原されて博物館と一体のものとして機能するよう建設が進められている。現在、園地は約70%の建設が進み、古民家も4棟が復原完了して一般の利用に供されている。

これからの民俗博物館のあゆみ、そして大和民俗公園の建設ともども県民に本県の民俗文化の理解と伝承を促す生涯教育の場として、あるいは、憩いの場として新しい時代の博物館への志向に大いなる展望を約束するものである。県民各位の変らぬ御支援をお願いする次第である。

（当館々長）

常設展新企画コーナー

「生業を支えた職人」展の開設に伴って

大宮 守人

開館5周年を期に、常設展の一部入れ替えを企画していたが、昨年12月23日から一般公開の運びとなった。

このコーナーは、従来の常設展「生業」(稲作、山の仕事、大和の茶、各コーナーから成る)との連続性を重視し、既存展示物をも生かそうという名人芸的発想からの企画であった。生業を支える職人として、鍛冶屋、櫓木屋、鋳師屋を取り上げ、稲作、林業等の生業に必要な各種の用具を、手工業的生産方式で、供給して来た様子を、職人の手がけた製品と製作工程、ジオラマ(鍛冶屋の仕事場のみ)によって紹介した。

鍛冶屋と鋳物師屋

鍛冶屋は、主に鉄を打って道具を作ったが、鋳物師屋は土を固めて作った鋳型に溶鉄を流し込んで形をつくる。鍛冶屋は、ムラムラには必ずあって、奈良盆地など農業が中心となる地域では、主に鍬、鋤を作り、野鍛冶と呼ばれた。また吉野などの山林業の盛んな地域では伐採や山林の手入れに使うヨキやナタなどの他、桶屋、樽丸師、曲物師、杵蓋作り・銘木(磨き丸太)化粧皮づくりなどの、木を加工する職人達が使う様々な用具も手がけた。それぞれの地域の主なる生業も密接な関係を持って、各職種によって違う使い勝手も考慮し、小規模ではあるが血の通った生産がおこなわれた。

鋳物師屋は、鍋、釜などを主に作ったが、県内では江戸時代の鋳鐘に活躍した香芝町五位堂の鋳物師が今日でも続いており、イモ備中やイモジ鍬、犂の先などの農具も多数手がけた。

櫓木屋

櫓木と書いてカタギというが、本来は、堅木である。櫓を主要な材料としたので、この称があると思われる。この職人は、櫓などの丈夫な材料を用いて鍬の柄や鍬の平(昔しの鍬は先だけが鉄で、中央は、ヒラ、フロという木の台に柄を通した)、鋤の柄平(鋤は柄と手が一本で作られる)を中心に、枅(荷い棒)

や様々な山林・土工用具の柄を製作し、各地の鍛冶屋などに供給した。

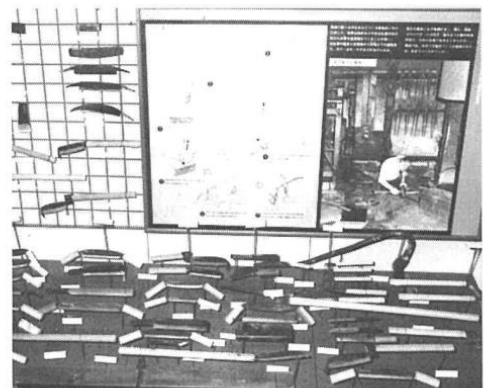
ほとんどのムラムラに存在した鍛冶屋とは違い櫓木屋は多くの場合、各地域の中心的な街道沿いの町にあり、その場所からの交通の便により、周辺の鍛冶屋と密接な関係を持っていた。

また、農耕具などは、地域の土質によっても形や重さ、角度が変化する。たとえば、鍬の場合、加茂、上粕、玉水など(京都府相楽郡)の木津川沿の砂質の地域では、鍬や鋤は細身で軽く、鍬の角度は鋭角(カギといい、直角に近い鈍角のものをノサという)で、土壌へのくい込みが少くないものが多い。鋤は、反鋤で大きな反りがついており、砂地の土を前進しながら、スコップのようにすくい上げるようにして畝を盛る。奈良市内の大安寺や西大寺近辺も反の大きい鋤を使うが、天理、桜井、田原本方面の鋤は、直鋤で柄も短く、粘土質の土壌に溝を掘るのに向いているという。つまり、すくい上げるのではなく、土壌に対して垂直に突き込み、土を立方体の固りとして掘り起こすのに便利に出来ている。

櫓木屋は、各地域の土質や用途習慣の差を熟知して製作したので、ムラムラの鍛冶屋との関係も一方が廃業しない限り続くのが普通であった。

展示の構成

当館の従来の展示では、小学校4～5年生を一応の対象とし、稲作、林業というテーマ



▲ 鍛冶屋コーナー

別に、生業の工程にストーリーを求め、最小限、展示された物の使われ方がわかるよう文字は少なめおさえ、イラストや写真を必ず添える事にしていた。しかし、よく見える大きさの写真やイラストのスペースを確保する必要から、展示資料の点数が少なくなり、ものたりないという意見もアンケート等に多くあった。

小学校、中高学年用の郷土学習の教材としては、簡潔でまとまりも良いと好評を得ていたが、一方では、博物館に何んぞ足を運んでも全てを見つけないほどの層の厚さを持つような展示（収蔵展示的なもの）も必要であると思われた。

今回の展示替えではこの様な点を考慮して、

- 1、鍛冶屋、鋳物師屋、櫓木屋の仕事の様子を工程を追いながら、材料、使用道具を一体にして示し、道具の用途や使われ方を展示された実物のみによって出来るだけリアルに展示する。
- 2、職人の使用した用具類の全てを見せる事により、多数の道具を使い分けたこと、用途に応じて少しずつ違う道具が工夫されたことを示す。
- 3、職人の手がけた製品の全てを見せる事により、様々な注文に幅広く応じたこと、地域によって、作る物に特色のある事などを示す。

という事を目標とし、基本計画を立てた。

当初案では入口ロビーに近い5.45m×16mのスペースを2区画、これに当て、各区画に1ヶ所ずつ、鍛冶屋と櫓木屋の仕事を、ジオラマ（実物大）風に復元し、鍛冶屋、鋳物師屋コーナーと櫓木屋コーナーを構成する事としたが、諸般の状況により、新設分は約半分のスペース（5.45m×18m）となり、ジオラマも、鍛冶屋の仕事を復元する事となった。しかし、許される範囲で、1～3の目標は全て盛り込み、展示資料の数の多さから見ても、これまで、当館の展示にはなかった厚みのあるコーナーとなったと考える。

ユニット展示システムについて

これは、当館展示室の建設当初からの特色である。つまり、館の基本設計の段階から周囲に大和の民家群を野外展示する計画を持ち、

大和民俗公園の本館としてふさわしい、位置と規模を考られていたのであるが、開館当初は、民家も未だ移築されていなかったのもので、野外展示物である民家との有機的な展示は行えなかった。

しかし、将来において全体計画が完成した場合館内の展示も公園中央館たるにふさわしいものに容易に変更出来るよう室内に柱もなく間仕切の壁もない1ルーム式の展示室とし、規格化したユニットパネル、ユニットステージのみによって、展示を展開する事となった。

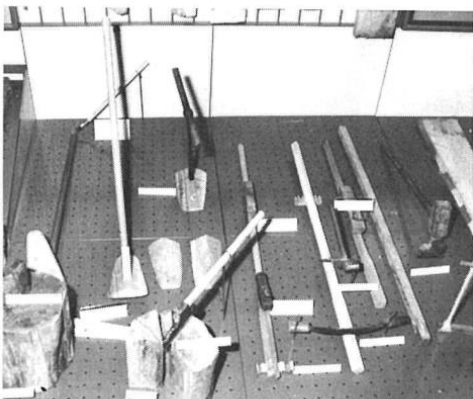
これらの配慮は、今回の展示替えでも十分生かされたと考える。

※新規常設コーナー「生業を支えた職人」展
新設にあたって下記の方々に協力をいただいた。ここに紙面をかりて感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

有江公司（御所市）、立花登（奈良市）、木村佳太郎（奈良市）、福井義一（室生村）、塚本元治（下城町）、太井寅男（菟田野町）、尾崎萬治郎（京都府・加茂町）、河合和一郎（奈良市）、福井栄次（五条市）、岸田善司（御所市）、浅田宗彦（天理市）、大西康弘（下市町）



▲鍛冶屋作業場 ジオラマ



▲櫓木屋コーナー

春季テーマ展「諸職一町の職人・村の職人」 芳井 敬 郎

職人とは「技に秀でた人」と解せられるが、この言葉が文献にあらわれるのは中世以降であり、時代によってその職種の範囲は異なっている。ちなみに、鎌倉期に成立したとみられる『東北院職人歌合』には医師、陰陽師、商人などもあげられている。それより後の江戸期の職人づくりの諸書にはほぼ現在とかわらぬ職種があげられている。おそらく、中世期は農民に対して特別の技術をもって暮しをたてるものを職人と解したと考えてよからう。それが時代が降り商人、芸人などと分化し、手工業を生業とするもののみを職人と呼ぶようになった。

民俗学において、職人に関する調査研究は重大な課題である。その調査は技術と使用具についてなされることが多い。両者は物質文化研究のなかで大きなウエイトを占めるものである。調査には作業内容の展開（工程）をまずおさえ、その工程についての詳細な記述化が必要となる。これは並々ならぬ忍耐と努力を要するものである。調査者は、長い経験のなかで積み上げられた技を一見したぐらいでは理解できない。それはその場その場で「臨機」がなされ仕事すすめるためである。筆者は奈良県吉野郡の主要な産業である割箸づくりについて調査した。訪問したのは、昨今機械化されるなかでほとんど手仕事で仕上げるお宅である。そこでは「木割り」、すなわち1膳分の箸を荒取りすることから作業がはじまる。箸の寸法に小切った平べったい木片を石の上に立て、包丁で木口から割っていく。その際、包丁を入れる位置が問題になる。なぜならば木片の長さは箸と同寸になっているため問題にならないが、1枚の木片の木口をきまった箸の厚みにもとづいて割るのに最大限多くとる必要がある。すなわちする部分を少なくしなければならない。その際、木目に添って割る。そのため包丁はクサビの役割をおこなう。以上のような要件を総合して木割りをするが、それについての調査者の理解の把握はたやすくはない。箸づくりにかぎらず、

道具とそれにともなう技術についての考察は職人の民俗文化についての問題点を拾い出すために避けて通れないことである。今回の展示ではただ単に職人の用いた道具の陳列に終わることになしに、なるだけ半製品から完成品まで、また作業工程の写真パネルなども併せて陳列して展示したい。そこで観覧者の見方として想起できることは、今日の機械文明との対比であろう。

冒頭では職人の概念既定の移りかわりを述べたが、本展示で民俗的にどのような業種をとりあつかう必要がいるか。

まず商業都市の方からみる。『大和高田市史』に記載する、寺内町を中心とする高田村の文政2年（1819）の「商店、職人分布表」のなかで酒造方、酢造方、味噌造方、藍染方、形附紺屋、大工職、左官職、屋根ふき職、綿打職、桶輸入職、鍛冶職、ちょうちんや、^{かたき}檜木屋などが職人の業種としてあげられている。酒、酢、味噌造方はもちろん醸造にたずさわるもの、藍染方は藍だてから染めまでおこなうもの、形附紺屋はおそらく仕入用の染め物を扱うもの、綿打職は各家々で収穫した繰綿を打つもの、桶輸入職は桶の製作や修理の為にタガをしめなおすもの、檜木屋は鋏、鋤の柄や車輪を製作するものと解してよからう。

農村部の方はどうであろうか。享保9年（1724）の「和州御領郷鑑」（柳沢文庫影写本、『香芝町史』に転載）には諸職として酒屋、油屋、大工、鍛冶屋、鋳物師、吹屋、朱挽、桶屋、



▲ 番カサづくり

紺屋があげられている。

以上のような都市、農村部の職種のうち今日ではみられないものもある。その一例として木挽屋がある。これはおそらく大きな縦挽きのノコ（木挽ノコ）を用いて丸太を板に挽く職業であろうが、今日では製材所がそのことをおこなうようになった。その他はほとんど残存するが、以前とは材料、製作法、使用具等異なる点が多い。たとえば大工の場合、むかしのように台付きカンナを用いることは少なくなり、その作業は電動カンナでおこなうことが多い。材料も集成材が用いられるようになった。しかし一方その仕事内容、諸道具ともむかしとほとんどかわらないものがある。桶屋などがその例である。おそらく一部の機械化は可能であろうが、今日では木の桶にかわって樹脂製が使用されることから需要

の減少によりなされないこともある。

前に述べてきた業種はほとんど庶民の必需品を取りあつかうものばかりである。ようすに衣、食、住、生産生業に関する業種でありその種類もまことに少ない。このことは、貨幣経済が余り浸透していない過去の暮らしのなかでは当然であつたろう。自給をむねとする生活のなかでは生活必需品はほとんど各家で用意したという。しかし、大がかりな設備を要するもの、製造、製作にかなり時間を要するもの、専門的な技術で製造・製作されたものの方が数倍も利用価値があるものなどの場合は購入したと考える。しかし、今日のようにその需要は大きかったわけでない。職人達は仕事の合い間には得意先である農民同様、百姓仕事をおこなう半農半工のものが多かったようである。



▲ 染色(藍染)の職人



▲ 桶づくりの職人

節 分 会

奥 野 義 雄

節分には、奈良県下だけでなく他府県でもその土地あるいは諸社寺の特色を表わした行事が行なわれる。たとえば、念仏狂言で周知の壬生寺でも^{ほうろう}炮烙割りの奉納が行なわれ、厄除けにかかわる法儀である。このように節分には、一種の「厄落し」の呪法がこめられていたのである。

では、「節分」という名称とその行事の意味する内容とは、どのようなものであったかを垣間見ながら、奈良県下の節分の行事をみていくことにしよう。

「節分」というのは、立春前日の除夜の民間行事に伴って起った祭事であるとされ、陰陽道・暦法とともに移入された言葉であり、とりわけ節分を重視した陰陽道の伝統的傾向は久しい（この節分に関する理解には若干の問題を含むので、この点については後日考えたい。当館「紀要」才4号にて検討する）。

また、節分には鬼ヤライの豆撒きの行事という概念が定着しているようである。しかし、この鬼の出現する行事は、追儺（会）の儀法であり、本来宮延で行なわれ、陰陽寮の官人・大舎人らによって催されたものであった。

今日でも、大和（奈良県）の寺院で追儺＝オニヤライを節分の夜に行なうところが少なくない。たとえば、奈良・興福寺東金堂で繰り広げられる〈鬼追い〉、吉野・金峯山寺蔵王堂を中心に行なわれる〈鬼火祭り〉などがあり、三匹の鬼（青・赤・黒鬼）と毘沙門天とが節分の夜に鬼退治の物語が繰り広げられる。そこには、〈鬼〉を邪悪・穢悪の代表として、これを退去せしめるという。一種の厄除けの内容をもつものである。このほか厄除けを主とする行事に、元興寺（極楽坊）で行なわれる〈火渡り〉の法儀がある。修験道・山伏の法力により、火渡りを行ない邪悪・穢悪を除くという行事である。

一方、大和の寺院で節分の日に行なわれる行事の他、各村・町で営まれる行事があるが、今日ではその姿も次第に消えつつある。つまり、ヒヒラギと鰯の頭をコウゾガラに刺した

ものを家の出入口（玄関）に挿し、夜に煎った豆を年令分の数だけ食べ、「鬼は外、福は内」と大声できけんで豆撒きをするのが一般的である（平群町富貴畑、西吉野村賀名生、奈良市押熊など）。ただ、この家（村・町）を単位とする節分にも若干の相異をみる。

たとえば、食べる豆の数も年令より一つ多いとか、氏神にも煎豆を持って供えとか（平群町域）、夕食には麦飯と塩鰯を食べるとか（西吉野村域）、豆を煎って黒塗りの盆の裏に豆の湯気が多いか少ないかによって農作物の一年間の豊凶を占うとか（奈良市押熊）、多少ともその地域々々によって節分の行事内容が違うのである。

また、大正4年の『奈良県風俗志』の大安寺村編をみると、

五、節分

い、悪魔除け、門口其他出入スル場所ニ柵ヲ挿シタ食ニ食フ鰯ヲモ柵ニサス
ろ、豆撒キ

(1)私宅ニ行フモノ



▲ 節分当日の豆撒き（元興寺）



▲ 節分の夕刻に行なわれる鬼追い（興福寺）

豆撒ノ儀式

撒キ手及其ノ服装、作法、唱へ方、
用具、屋内豆撒キ場所

一家ノ主人ガ服装（垢ノツカザル
着物）ヲ正シ家内中ノ寢靜マリシ
ヲ待チ一升枡ニ豆ヲ入レ「福ハ内
鬼ハ外」ト三唱シツ、奥座敷ヨリ
順次口ノ間ニ撒キ來リ終リニ乾ノ
角ニドツサクコト捨テオク、

(2) 社前ニ行フモノ

方法、参拜、目的

目出度年ヲタバリ長命ヲ祈ランガ
爲氏神ニ参拜シ拜殿ニ於テ巳ガ豆
ヲ撒キ年ヲタバル、

（下 略）

とあり、大正年間の大安寺村（奈良市大安
寺町）の節分行事の様子が窺える。ここで注
視しなければならないのは、節分の豆撒きの
終わった後に、「乾ノ角」（北西）に残った豆を捨
てておく意味に一つの方相性を見出しうるの
ではないかと考えられる。

また、同じ『風俗志』の田原本町・多村・
平野村編の節分の項をみると、

五、節分 平年ハ二月四日、閏年ハ二月三
日ニ行フコト昔モ今モ同ジ、

い、悪魔除ケ 枡ノ葉ニ鰯ノ頭ヲ各戸入口
ニサス。

ろ、豆撒キ、

(1) 私宅ニ行フモノ

豆撒キノ種類 黒白色ノ大豆ヲ用フ。
豆撒キノ儀式、豆ヲイル鍋釜ヲ清メ
テ其ノ所ニテイリ、神佛ニ供へ、其
ノ餘分ヲイカメシキ服装ヲシテ、紙
付草履ヲ穿テ籠ニ豆ヲ入レ、鬼ハ外
福ハ内ト□リニ呼聲高ク屋敷ノ周圍
ニ撒キ、ソレヨリ門口納屋ノ入口、
庫、本屋座敷、風呂、廁等ノ入口ニ
前ト令様ノ呼聲ニテ撒キ終ル。

(2) 社前ニ行フモノ、豆ヲ紙ニ包ミ神社
ノ社殿ノ前ニテ長壽ヲ祈リツ、豆ヲ
供ヘル、

とみえて、この地域でも節分行事の様子は
同じであったことがわかる。この田原本町・
多村・平野村（田原本町田原本・多・平野）
では、当時豆撒きには他地域と同様正装する

が、紙付きの草履をはいて行なったようであ
る。現在では、田原本町域でも節分の夜にこ
のような様相を呈して営むことはない（田原
本町北阪手など）。ただ、節分の行事を通じて
「厄除け」「悪魔除け」の所謂厄落しとしての
習俗が村や町の人たちの観念として根強くの
こっていることが窺える。

しかし、『大乘院寺社雑事記』（二）の長禄
二（1458）年十二月晦日の条にみえる次の文
言から、今日の「悪魔払い」「悪魔除け」の観
念はみられないのである。すなわち、

一、去廿四日節分經卷數、御承仕專清進之、

節分御經事

心經三百六十卷

觀音經卅三卷

三十頌十一卷

爲御息災遠命奉讀誦狀如件、

というのがそれであり（傍線一奥野）、悪
魔除けというよりも、むしろ災難除けと延命
祈願であつたことが窺えるのである。この祈
願は、豆撒きを通じてではなく、「心經」「觀音
經」などの読經によって行なわれるべきもの
であつた。この節分行事の内容は16世紀末ま
で受け継がれていくことが史料から窺え、悪
魔払い＝邪惡・邪鬼退散を祈願する要素は16
世紀末以後と考えられうる。そして、豆撒き
の行事もこれに伴なって出現してきた形態で
はないかと推察しているところである。



▲ 火渡りの行法（元興寺）

昭和54年度事業報告

(昭和54年4月1日)
(昭和55年3月16日)

◀博物館事業▶

❖展 示

昭和54年4月1日～6月3日

テーマ展 竹・伝承技術と信仰

昭和53年6月1日～昭和54年12月12日

コーナー展 遊びと玩具

昭和54年6月9日～9月24日

テーマ展(長期) 日々の暮らし
～暮らしと用具Ⅰ～

昭和54年9月30日～11月25日

特別テーマ展 寺院と年中行事

昭和54年12月2日～昭和55年3月30日

テーマ展(長期) 日々の暮らし
～暮らしと用具Ⅱ～

昭和55年12月23日より開設

常設コーナー(新企画) 生業を支えた職人

❖移動展

1/6～1/8 南都銀行本店

(テーマ展紹介)

1/9～1/11 南都銀行本店

(特別テーマ展紹介)

5/12～5/14 南都銀行本店

(新規常設コーナー紹介)

3/4～3/6 新庄町中央公民館

(仕事と暮らし)

※観覧者総数約750名(3日間)

❖体験学習講座

1月28日 凧づくり

2月25日 手まりづくり

3月25日 ゴウリづくり

4月29日 ミづくり

5月27日 番ガサづくり

6月24日 吉野カゴづくり

7月22日 ザルづくり

8月26日 シャクシづくり

9月23日 ワリバシづくり

10月28日 オケづくり

11月25日 ナベツカミづくり

12月23日 シメナワづくり

1月27日 タコづくり

2月24日 竹トンボづくり

❖民俗講座

昭和54年5月13日PM2～4

「竹と生活用具」

講師 国立民族学博物館教授中村俊亀智氏

「竹と人生」

講師 京都大学名誉教授 上田弘一郎氏

昭和55年3月9日 PM2～4

「衣・食・住 その生活と用具」

講師 八代学院大学教授 林 宏氏

「刃物のあゆみ」

講師 奈文研・埋文センター 町田 章氏
遺物処理研究室長

❖民家講座・民家移築復原工事現場見学会

昭和54年9月9日 民家講座

「伝統的建造物群について」

講師 奈文研・遺構調査室長 宮本長二郎氏

「近畿の民家について」

講師 奈文研・建造物調査室長 吉田 靖氏

昭和54年11月25日(才1回)

重文・岩本家移築復原工事現場 見学会

「民家移築復原について」(吉田靖氏)の
重要性を解説後、重文岩本家解体部材見学
(才2回以後の見学会は新聞等で公表する)

❖子供の民俗教室(新規)・親と子の民俗教室



昭和54年5月5日 子供の民俗教室

人形劇「竹取物語」

影絵「もちもちの木」

演出・出演等は佐保学院短期大学人形劇
「えのぐ箱」の部員による。

昭和54年7月28日～29日 親と子の民俗教室

「竹細工とくらし」

講師（実習指導共）中西浩文氏

❖特別テーマ展

特別講演と特別スライド・映画の会

昭和54年10月7日・11月18日 PM2～

スライド「修正会・修二会」

映画「東大寺お水取」

スライド「盆行事と念仏講」

映画「東大寺お水取」

昭和54年10月21日 PM2～

「寺院と年中行事」列品解説

当館学芸員 浦西勉

「寺院と年中行事」

講師 京都大学名誉教授 柴田實氏

昭和54年11月4日 PM2～

「村落と年中行事」

講師 当館学芸員 浦西勉

「庚申信仰について」

講師 小泉庚申堂住職 井村良襄師

❖民俗資料燻蒸

昭和55年3月23日～3月26日 新規収蔵資料

❖印刷物

研究紀要 第3号

博物館だより Vol. V No.4～Vol. VI No.4

寺院と年中行事（特別テーマ展図録）



◀広報活動▶

❖テレビ・ラジオ

4月20日 「竹・伝承技術と信仰」展紹介（奈良テレビ）

5月27日 体験学習講座番ガサつくり紹介（奈良テレビ）

6月8日 体験学習講座（開館後全般）紹介（NHKテレビ）

6月22日 テーマ展「竹・伝承技術と信仰」展紹介（奈良テレビ）

7月29日 民俗教室の紹介（奈良テレビ）

8月1日 民俗教室の紹介（NHK FM ラジオ）

12月23日 体験学習講座シメナワつくり紹介（読売テレビ）

12月28日 体験学習講座シメナワつくり紹介（奈良テレビ）

⁵⁵1月11日 博物館・民家の紹介（奈良テレビ）

1月28日 農耕具・民俗博物館をたずねて（奈良テレビ）

❖新聞

1月11日～12月27日 「やまとの民俗」（朝日新聞奈良版連載）

2月24日 テーマ展「木と民俗」〔こころのページで〕紹介（読売新聞）

3月6日 旧鹿沼家一般公開紹介（読売新聞）

4月11日 テーマ展「竹・伝承技術と信仰」展紹介（朝日新聞）

4月17日 旧鹿沼家一般公開紹介（サンケイ新聞）

4月21日 旧鹿沼家一般公開紹介（朝日新聞）

4月25日 旧岩本家移築復元紹介（朝日新聞）

4月28日 テーマ展「竹・伝承技術と信仰」展紹介（読売新聞）

5月12日 テーマ展「竹・伝承技術と信仰」展紹介（毎日新聞）

5月13日 旧前坊家・旧岩本家移築紹介（奈良新聞）

5月29日 民家・民俗公園紹介（朝日新聞）

5月23日 旧岩本家移築紹介（読売新聞）

6月7日 民俗博物館（ぶらり館めぐり）紹介（奈良新聞）

6月14日 テーマ展「日々のくらし～くらしと用具～」紹介（読売新聞）

9月26日 特別テーマ展「寺院と年中行事」紹介（奈良新聞）

9月29日 特別テーマ展「寺院と年中行事」紹介（朝日新聞）

11月24日 旧岩本家移築復元工事現場見学会紹介（奈良新聞）

11月24日 旧岩本家移築復元工事現場見学会紹介（朝日新聞）

12月11日 新企画常設コーナー「生業を支えた職人」展紹介

12月18日 新企画常設コーナー「生業を支えた職人」展紹介（サンケイ新聞）

- 12月12日 新企画常設コーナー「生業を支えた職人」展紹介（朝日新聞）
 3月7日 民俗講座・テーマ展「日々のくらし」紹介（毎日新聞）

◀日記抄▶

- 3月7日 国学院大学博物館実習
 3月15日 貝塚市教育委員会来館
 4月29日 久御山町教育委員会来館
 6月20日 天理市教育委員会来館
 7月4日 野迫川村教育委員会来館
 7月10日～13日 関西学院大学博物館実習
 8月31日～9月2日 同志社大学博物館実習
 9月4日 花園大学博物館実習
 10月23日 堺市教育委員会来館
 10月25日 県教育委員会学校放送課来館
 11月20日 大谷女子大学博物館実習
 11月20日 大阪芸術大学博物館実習
 1月26日 日本博物館協会来館
 2月28日 福井県・三国町教育委員会来館
 3月14日 群馬県立歴史博物館々々来館

◀管理・運営▶

❖職員

館長 長川内 一郎 総務係長 井村 操
 次長 長山下 勝 主事 和田 泰子



主事 吉岡 豊 学芸主事 徳田 陽子
 嘱託 岡崎 梅吉 建造物係長 長谷川 晋平
 学芸係長 奥野 義雄 技師 今西 良男
 学芸主事 芳井 敬郎 施設係長 藤堂 利明
 大宮 守人 技師 倉窪 孝
 浦西 勉

❖人事移動

学芸主事 松崎憲三 転出（54年1月15日付）。技師 井上広和 転出（54年4月1日付）。主事 富畑るみ 転出（54年4月1日付）。学芸主事 徳田陽子 転入（54年7月1日付）。

❖民俗専門委員会

池田源太（龍谷大学教授）、平山敏治郎（成城大学教授）、堀井甚一郎（奈良教育大学名誉教授）、林 宏（八代学院大学教授）、岸田定雄（近畿民俗学会代表理事）。

❖民家専門委員会

杉山信三（近畿大学教授）、工藤主章（文化庁文化財保護部建造物課主任文化財調査官）、吉田 靖（奈良国立文化財研究所建造物室長）、青山賢信（大阪工業大学教授）。

❖昭和54年度予算（単位千円）

- 民俗博物館運営費 114,964
- 職員費 58,643 管理費 37,460
- 研究調査費 1,660 広報費 1,351
- 運営費 15,850
- 公園整備事業費 232,000

◀公園等整備事業▶

❖民家

重文・旧岩本家住宅（昭和54年10月解体完了）
 旧岩本家住宅（昭和55年1月より復原開始。
 二年継続）
 旧前坊家住宅（昭和55年3月解体完了予定）

❖公園整備

	53年度完成	54年度完成予定
公園完成面積		
園路延長	200m	200m
休憩所		棟
バーコラ		2棟
池	1ヶ所 300㎡	1基
植栽		
高木	100本	1577本
低木	600本	2155本
芝生	300㎡	3760㎡

寄贈民俗資料分類目録

(54年1月から
55年1月まで)

昭和54年1月より昭和55年1月に至る間、35名の方々から136点に及ぶ民俗資料をご寄贈いただきました。ご芳名を記し、厚く御礼申し上げます。(順不同、敬称略)

分類番号・調査番号 民俗資量名 数量 採集地 寄贈者氏名 備考

■ 衣・食・住 ■

(A) 服飾

A-A 1074 番傘 1 吉野町宮滝 山田 実

(B) 食事

B-B 1052 五斗樽 1 奈良市押上町 迎田 平一

B-C 1137 鍋 1 香芝町五位堂 杉田 仁作

B-F 1045 酒搾り用舟 1 奈良市押上町 迎田 平一

1046 酒搾り用押え蓋 1 〃 〃

1047 酒搾り用杵 1 〃 〃

1048 酒搾り用枕木(小) 3 〃 〃

1049 酒搾り用枕木(大) 1 〃 〃

1050 舟用掛具 1 〃 〃

1051 半切(割蓋付) 1 〃 〃

1053 醸造用半切 4 〃 〃

1055 酒しぼり袋 11 〃 〃

B-G 1054 五合徳利 1 〃 〃

1056 一升徳利 1 〃 〃

1116 タバコ巻用具 1 加茂町新町 尾崎萬 治郎

1117 タバコ巻用具 1 〃 〃

(C) 住居

C-B 1112 荒神釜 1 式 奈良市奈良阪町 山口幸一郎

1063 水屋 1 大和郡山市朝日町 吉村 正雄

C-C 1059 僧侶カゴ 1 平群町越木塚 巳波 秀一

C-D 1060 衣裳カゴ 1 〃 〃

1067 コタツ 1 吉野町矢治 阪本 正男

1083 屋外アンドン 1 橿原市今井町 的場 滋佳

C-D 1146 テアブリ 1 奈良市七条町 片岡伊佐雄

■ 生産・生業 ■

(D) 農耕

D-A 1143 株切り鋤 1 奈良市今市町 木村佳太郎

1136 カラスキ先 1 香芝町五位堂 杉田 仁作

1104 田舟 1 天理市櫛本町 堀内覚太郎

1085 万年鋤 1 大和郡山市中城町 奥田 忠信

D-C 1086 鎌(右) 4 〃 〃

1087 鎌(左) 1 〃 〃

1080 俵 6 月ヶ瀬村月瀬 今西 信義

1089 イネコキ 1 奈良市秋篠町 谷村 喜一

1140 鎌 4 奈良市今市 木村佳太郎

D-D 1058 イノコ座の御供棚 1 桜井市浅古 前田 孝治

(F) 漁撈

F-B 1065 ウグイ用モンドリ 1 吉野町矢治 阪本 正男

1068 モンドリ 1 東吉野村小栗栖 松本義太郎

1069 ウナギモンドリ 1 〃 〃

1070 ウケモンドリ 1 〃 〃

1072 ヤナ(模型) 1 〃 〃

(H) 養蚕

H-B 1073 マユカゴ 1 大淀町下瀬 鍵谷 一隆

(K) 手工・製造

K-B	1075	吉野カゴ・未完成品	3	大淀町下淵	鍵谷 一隆
	1076	角箕・未完成品	2	天理市田井庄	中島 清春
K-B	1077	丸 箕	2	橿原市今井町	黒松 宏允
	1079	カゴ・未完成品	2	大淀町下淵	鍵谷 一隆
	1078	四ツメカゴ	2	奈良市南京終町	中西 浩文
	1105	餅搗臼	1	奈良市半田中町	吉沢 正治
	1106	コウジブタ	10	〃	〃
	1107	セイロ	1	〃	〃
	1108	菓子の型	1	〃	〃
	1111	ホッカイ	1	〃	〃
	1082	茶 筥	1	大和郡山市九条町	井村佳津子

(L) 諸 職

L-B	1065	大工道具	1 式	吉野町矢治	阪本 正男
	1114	サーブノコ	1	加茂町新町	尾崎萬 治郎
	1115	櫛木用ヤリガンナ	1	〃	〃
	1120	櫛木用両刃の一枚ガンナ	1	菟田野町古市場	太 井 寅男
	1121	〃	1	〃 〃	〃
	1122	平鍬半製品	1	〃	〃
	1123	〃	1	〃	〃
	1124	平スキ半製品	1	〃	〃
	1125	マエビキ	1	奈良市大柳生町	南垣内幸一
	1127	玉 鋼	1	下市町善城	塚本 元治
	1128	タ ガ ネ	2	〃	〃
	1129	台	1	〃	〃
	1134	床ガネ	2	香芝町五位堂	杉田 仁作
	1135	ヘ ラ	1	〃	〃
	1138	鋳 型	4	〃	〃
	1139	板 型	1	〃	〃
	1141	アテベシ	1	奈良市今市	木村佳太郎
	1142	タガネ	2	〃	〃
	1144	自在ツリ	1	〃	〃
	1145	ハサミ	1	〃	〃

■ (N) 交通・交易 ■

N-B	1103	行商用カゴ	1	斑鳩町神南	吉川 雅堂
	1057	銭 箱	1	奈良市押上町	迎田 平一
N-C	1088	斗 櫛	1	奈良市春日野町	田中 昭光
	1061	ハカリ	1	大和郡山市朝日町	吉村 正雄
	1109	ハカリ	1	奈良市半田中町	吉沢 正治
	1110	コバカリ	1	〃	〃
	1149	米サシ	1	大和郡山市永和町	鹿沼治三郎

■ (P) 信仰 ■

P-C	1146	牛玉杖 (お水取り用)	1	奈良市雑司町	上司 永慶
P-G	1147	差 懸 (〃)	1	〃	〃
	1148	カミコの衣装 (〃)	2	〃	〃
	1043	カミシモ	1 式	大和高田市三和町	田川善兵衛

■ (Q) 民俗知識 ■

Q-C	1043	カタモミ	1	奈良市大柳生町	南垣内幸一
-----	------	------	---	---------	-------

■ (R) 民俗芸能・娯楽・遊戯 ■

R-B	1062	オルガン	1	大和郡山市朝日町	吉村 正雄
R-I	1113	容真流花道家元用具	1 式	奈良市三条町	符阪 恵有

■ (T) 年中行事 ■

T-A	1044	筒粥・水溜祭の竹筒	1	大和郡山市矢田町大宮	矢田坐久志玉比古神社
	1071	弓射神事用具	1 式	田原本町北阪手	北阪手区
	1081	光仁会笹酒用具	1	奈良市大安寺	河野 清晃
T-D	1066	ダイリ雛	1	吉野町矢治	阪本 正男

寄贈図書目録

(53年8月から
54年11月まで)

《目録》	《書名》	《巻数》	《寄贈機関名》
近世文書目録第1	天理図書館		
熊野喜蔵氏資料目録1	北海道開拓記念館		
資料目録	日本民家集落博物館		
紀伊風土記の丘所蔵品目録1	紀伊風土記の丘資料館		
資料目録(昭和50年4月30日現在)	輪島市立民俗資料館		
調布市郷土博物館資料目録4	調布市郷土博物館		
蔵品目録第2集(絵画篇Ⅰ)	奈良県立美術館		
愛媛県博物館資料総合目録第2集	愛媛県立博物館		
大和考古資料目録第7集			
	奈良県立橿原考古学研究所附属考古博物館		
兵庫県立近代美術館蔵品目録	兵庫県立近代美術館		
学術雑誌目録(英文)1979	国立民族学博物館		
群馬県立博物館22年史	群馬県立博物館		
【年報】			
山口博物館報昭和53・54年	山口県立山口博物館		
平塚市博物館年報No.2・No.3	平塚市博物館		
沖縄県立博物館年報No.11	沖縄県立博物館		
資料館報No.9	埼玉県さきたま資料館		
奈良国立博物館年報昭和51年度	昭和52年度		
	奈良国立博物館		
ブリヂストン美術館館報26・27	ブリヂストン美術館		
紀伊風土記の丘年報第5号			
	和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所		
名古屋市立博物館準備年報No.4	名古屋博物館		
年報昭和52年度・昭和53年度	同上		
岐阜県博物館報第1号・第2号	岐阜県博物館		
博物館学年報第10号	同志社大学		
津山洋学資料第1集	津山洋学資料館		
調査研究年報第3号	青森県立郷土館		
京都国立近代美術館年報昭和52年	京都国立美術館		
瀬戸内海歴史民俗資料館年報第4号			
	瀬戸内海歴史民俗資料館		
明大商品陳列館報第3号	明治大学商品陳列館		
リトルワールド年報1号	人間博物館リトルワールド		
福岡市立歴史資料館年報No.7	福岡市立歴史資料館		
年報昭和53年度	東北歴史資料館		
山形大学附属博物館報6	山形大学附属博物館		
宮島歴史民俗資料館年報1			
	宮島町立宮島歴史民俗資料館		
館報8	鳳来寺山自然科学博物館		
天理大学学報121・122	天理大学学術研究会		
木下美術館館報Ⅳ	木下美術館		
青森県立郷土館報6	青森県立郷土館		
宮崎県総合博物館年報昭和52年度・昭和53年度	宮崎県総合博物館		
北海道開拓記念館研究年報7号	北海道開拓記念館		
橿原考古学研究年報1976・1977	橿原考古学研究所		
海と人間年報6・7・資料紹介	海の博物館		
奈良県立美術館年報昭和52年	奈良県立美術館		
群馬県立博物館報第21号・昭和53年度臨時号			
	群馬県立博物館		
津山郷土館報11津山における心学史料(上)	市立津山郷土館		
北九州市立歴史博物館1・2	北九州市立歴史博物館		
【紀要・報告書】			
桜井女子短期大学紀要1	桜井女子短期大学		

《書名》	《巻数》	《寄贈機関名》
同志社田辺校地及びその周辺の地質		同志社大学校地学術調査委員会
常盤井殿町遺跡発掘調査概報	同上	
紀の川用水建設事業に伴う発掘調査報告書		和歌山県教育委員会
根来寺坊院跡発掘調査概報1	同上	
沖縄県立博物館紀要第4号・第5号		沖縄県立博物館
英彦山求菩提山仏教民俗資料緊急調査報告書		元興寺文化財研究所
霊山寺民俗資料緊急調査報告書	同上	
国立民族学博物館研究報告第3巻第2号～第4巻第2号		国立民族学博物館
研究報告1		岡山県立博物館
埼玉の万作		埼玉県教育委員会
稲荷山古墳出土鉄剣銘嵌銘概報	同上	
道成寺発掘調査報告Ⅰ		和歌山県教育委員会
西庄地区遺跡発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ	同上	
紀の川用水幹線水路建設に伴う緊急発掘調査概報	同上	
昭和53年度佐野庭寺発掘調査概要	同上	
鳴神地区遺跡発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ	同上	
紀伊阿須賀遺跡第2次発掘		新宮市教育委員会
研究紀要第2号		奈良佐保女学院短期大学
北海道開拓記念館調査報告17・18		北海道開拓記念館
浦和市郷土博物館研究調査報告書第6集		浦和市博物館
民俗学研究所紀要第3集		成城大学民俗学研究会
府中市立郷土館紀要第5号		府中市立郷土館
府中市自然調査報告第8次調査		同上
沼津市歴史民俗資料館紀要3		沼津市歴史民俗資料館
古文書(1)小海増田家文書1	同上	
有形民俗資料調査報告書		鹿児島県明治百年記念建設室
紀要10号		石川県立郷土資料館
大阪城天守閣紀要第7号・別冊		大阪城天守閣
瀬戸内の海事史資料調査報告第1集		
		瀬戸内海歴史民俗資料館
瀬戸内の海上信仰調査報告東部地域	同上	
瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具と習俗	同上	
西宮の年中行事		西宮市教育委員会
静岡市立登呂博物館研究調査報告第5集		静岡市立登呂博物館
博物館実習報告第2号		池田源太氏
韓国における仏教民俗文化財の調査		元興寺文化財研究所
般若寺民俗資料緊急調査報告書	同上	
比良山系における山嶽宗教の調査概要	同上	
大手山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書		青森県立郷土館
宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書	同上	
九艘泊・蛸田の民俗	同上	
天津小湊町の文化財		千葉県立安房博物館
研究紀要4		宮崎県総合博物館
大谷女子大資料館報告書1		大谷女子大学資料館
奈良大学紀要No.7		奈良大学
研究紀要1		北九州市立歴史博物館
市原市地名集		市原教育委員会
佐倉市の指定文化財		佐倉市教育委員会
奈良市災害編集年史		奈良市史編集議会
塩屋地区遺跡発掘調査概報第1次		御坊市教育委員会

〈書 名〉	〈巻数〉	〈寄贈機関名〉
イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告		奈良文化財研究所
研究紀要第5巻		東北歴史資料館
多賀城と関連遺跡		同 上
東北歴史資料館資料集1		同 上
大野城市の文化財第11集		大野城市教育委員会
上三ヶ尾平井遺跡		野田市平井遺跡調査団
惣右衛門の民俗		戸田市史編さん室
頼朝の時代		三島市郷土館
おじいさんやおばあさんから聞いた話第1集		東南町立南小学校
平塚市博物館資料No.16・No.18・No.20		平塚市博物館
平塚市須賀の民俗		同 上
秋田県立博物館研究報告		秋田県立博物館
奈良県史蹟勝地調査会報告書IV		大和文化財保存の会
小深・石見川の民家		河内長野市教育委員会
栃木県民俗地図II		栃木県郷土資料館
和良乃民俗		東洋大学民俗研究会
花摘寺跡発掘調査報告I		草津市教育委員会
鮎ずし切りの神事		同 上
年齢階梯制III		文化庁文化財保護部
中付鷲者の習俗		同 上
東郷の郷土資料I		東郷町教育委員会
群馬県立博物館研究報告第14集		群馬県立博物館
久保田遺跡地遺跡詳細分布調査報告		沖縄県立博物館
福生市の遺跡1977		福生市教育委員会
滝沢の田遊び		藤枝市埋蔵文化財調査事務所
南佐久宮ノ平の信仰と生活		武蔵大学人文学部日本民俗史演習
研究紀要1		埼玉県立歴史資料館
尾張の国宝・重要文化財		名古屋博物館
昭和53年度唐古・鍵遺跡		田原本町教育委員会
【単行本・図録】(54/9まで)		
火山と地震		平塚博物館
武藤一郎コレクション図録		秋田県立博物館
図録防長ゆかりの名宝		山口県博物館
図録ろばたとくらし		東北歴史資料館
仙台藩の家臣展示解説		同 上
図録		君津市立久留里城址資料館
埼玉県立博物館展示解説歴史1		埼玉県立博物館
埼玉県立博物館展示解説古美術		同 上
大和松尾寺の歴史と文化		松尾寺
紀伊国		紀伊国風土記の丘資料館
たたら		和鋼記念館
歴史への招待		名古屋博物館
尾張の国宝重要文化財展		同 上
収蔵品展		同 上
臼一食の道具		同 上
富岡鉄斎 布施コレクション		木下美術館
平櫛田中特別展		岡山県井原市立田中美術館
野沢如洋展		青森県立郷土館
広島県立歴史民俗資料館展示図録1979		広島県立歴史民俗資料館
海苔と行徳		市立市川博物館
北上川流域の自然と生活の歴史		北上市立博物館
特別展はこぶ展一生活と運搬一		沼津市歴史民俗資料館
仏教美術コレクション展		小松市立博物館
吉野路案内記		吉野町役場
山元恵一遺作展		沖縄県立博物館
館蔵品シリーズ 沖縄の陶器・絵画		同 上
特別展沖縄の洞穴と洞穴生物		同 上
博多祇園山笠展1979		福岡市立歴史資料館

〈書 名〉	〈巻数〉	〈寄贈機関名〉
野村望東尼遺品図録		同 上
塩と生活		たばこと塩の博物館
青柳種信		福岡市立博物館
日本の暦		三島市郷土館
須恵町の文化財1		須恵町立歴史民俗資料館
春日井の年中行事		春日井市教育委員会
続春日井の民俗		同 上
春日井の文化財		同 上
さつまいも文化		原野農芸博物館
狛犬		林孝夫氏
勢陽考古録		三重県郷土資料刊行会
松山のむかし話		松山市教育委員会
日本の歴史(1)		文英堂
一人の「プリヤートモンゴル人」		と日本青年の出会い 岡本俊雄氏
香芝町内の伝説		香芝町サンデー文化教室
目でみる浜松の歴史		浜松市博物館
つくはら		神戸市教育委員会
校注大同類聚方		池田末則氏
豊橋美術展		豊橋市美術館
司コレクション展		同 上
高爪山と福浦港		石川県立郷土資料館
京都府の民具2・3		京都府立総合資料館
大和国若槻史史料補遺		柳沢文庫
願かけと奉納物1		八王子市郷土資料館
大和とその周辺		池田源太氏
古代日本民俗文化論考		同 上
古代の石見		八雲立つ風土記の丘資料館
調布の野仏と村の信仰		調布市郷土博物館
新沢千塚の遺宝		千塚資料館
奈良のみち		近畿日本鉄道営業企画部
江戸小袖展		町田市立博物館
吉野川分水史		奈良県
たねと実の世界		大阪市立自然史博物館
大阪の化石 展示解説5集		同 上
和泉山脈の自然		同 上
大阪の昆虫		同 上
チョウはどこから来たか		同 上
大阪の自然		同 上
大阪湾の海岸生物		同 上
二上山		同 上
鳴く虫		同 上
伊丹の酒造り道具		伊丹市立博物館
フィリピン島の鳥と昆虫展		同 上
正倉院展目録78・79		奈良国立博物館
法華経の美術		同 上
ヨーロッパのポスター		京都国立近代美術館
異色の水墨画家		同 上
ブレ・インカの染織		同 上
フランス近代絵画展		同 上
スカンディナヴィアの工芸		同 上
安井曾太郎		同 上

(以下次回)

※「年報」「報告書」ならびに「紀要」等の図書を主にまとめましたので、「館だより」「ニュース」の図書については、割愛させていただきましたので、ご寄贈いただきました関係機関各位においてはご了承くださいますよう紙面をかりておことわりいたします。

大和のオコナイ

浦西 勉

—明日香村稲淵の場合—

奈良県下特に山辺郡を中心に「オコナイ」と呼ばれる行事がある。この行事は村落において豊作祈願として熱心に続けられている。

今回は、明日香村稲淵で続けられている「オコナイ」を紹介することにする。分布的には明日香村の「オコナイ」行事はめずらしいものである。稲淵の「オコナイ」は堂講または大日講(証文講とも言う)とよばれる人々が行っている。稲淵の竜福寺(浄土宗)の境内に大日堂がありこの仏像を信仰の対象とした講である。この堂講は代々定った次の6軒である。

豊田繁・小倉豪三郎・杉本吉雄・中谷善行・松尾氏
遠根弥作氏

今は、松尾氏と遠根氏は参加していない。この講の持ち回りのものは次の通りである。

(1) 文書3点

「明治三十年旧正月二十六日 堂講中諸精算帳」

「大正二年四月二十三日 堂講中諸精算帳」

「昭和五年四月二十六日 堂講中諸精算帳」

「昭和十三年十月二日 堂講中諸精算帳」

(2) 牛玉宝印の板木

「享保十一年 (以下読めず)」

(3) 牛玉の朱印(大・小)

(4) 角の印板

(5) 朱印の腕

(6) 竹の皮のバレン

(7) 朱ぬりの腕 7点(御供用)

(8) 高杯

天文十二年 十二月十六日 本願主 大御子次郎
又四郎
弥四郎

以上八点を持ち回っている。(8)の高杯は天文十二年の銘があり、この行事の古さを感じさせる。

さて行事は1月6日に行なわれる。竜福寺にて牛玉板木を和紙にすって、牛玉の朱印を押す。それをネコヤナ

ギの小枝にはさむ。それを大日像の前に供える。供え物は高杯の上に、焼き物は鯖のツクリ半匹(もとは鯛)・平には豆腐・油揚げ・イタ半・坪には豆・汁は豆腐の味噌汁をのせて、仏前に供える。供えものがすむと竜福寺の僧侶の読経が始められ、行事はこの経が終れば一応終る。山辺郡などは「乱声」などあるがここではない。しかし牛玉宝印は同じである。この牛玉札をはさんだネコヤナギの木は各家々にくばられたそうである。またこのネコヤナギの木は牛玉札だけをはさみ、1月15日の小正月のトンドの中心に立て、そのまわりに藁やシメナワを置いて焼いた。牛玉札はモミマキの時までおいておき、水口まつりの時竹にはさんで立てる。なお水口まつりには飛鳥神社の御田植祭の松もいっしょに立てる。

この行事は堂講の人達を中心になって続けられる「オコナイ」行事の一例である。山辺郡などの「オコナイ」は「乱声」や「弓ウチ」や「カンジョカケ」などが附随していて大変にぎわうが、稲淵では形式のみになってしまっている。なお明日香村で確認できるのは明日香村上平田のショウゴン講の2例ぐらいであろう。

(註) 小倉豪三郎氏(明治29年生れ)から聞く。



▲ 高杯の裏面

★★★★ おしらせ ★★★★★

● 民俗博物館の行事予定

55 4月5日～6月1日

テーマ展「諸職一村の職人・町の職人」

☆上記のテーマ展示替のため4月1日から4月4日までテーマ展示室は閉室いたします。

4月13日 民俗講座(PM2～PM4)

講師 国立民族学博物館 大塚和義氏

「伝承としての職人の技術について」

講師 大阪芸術大学 村松 寛氏 「職人と工芸」

4月27日 体験学習講座〈ゾウリづくり〉(AM11～PM2)

5月25日 体験学習講座〈ナベツカミづくり〉

6月22日 体験学習講座〈竹馬・コッポリづくり〉

《表紙解説》 二月に行なわれる修二会の行事の内、東大寺のお水取りは著名である。二月二十日の試別火から始まり、総別火・上七日・下七日と行事が移り、三月一日から本行が行なわれる行事である。

■ 編集後記 ■

寒い朝、そして早春の陽ざしが照りはえる日中対照的な気候に色どられた3月半過ぎ。もう、そこまで春の響がきこえる。

博物館も開館以来、脚光と残照の中で民俗文化の啓蒙と普及にあけてきたように思える。しかし、この成果も6年目を向えながら充分な答えとして返ってきていないのが現状である。単に民俗文化への思考への低迷さだけであらうか。(3)